

KEY

ワード

第
93
回

「大大阪記念博覧会」の謎が解けるか 新しいものを発見するのがミュージアム

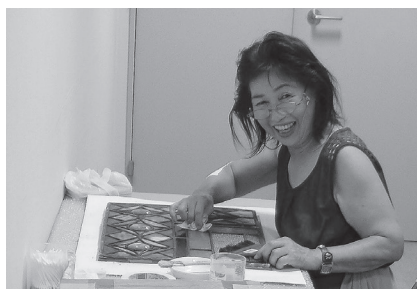
ミュージアムへの思いは人それぞれだが、博物館活動の基本中の基本として調査研究が重要であることを、思い知らされた。開催中(9月2日まで)の大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)の特別展「大大阪モダンイズム-片岡安の仕事と都市の文化-」に協力して調査した結果、大阪市役所の庁舎で保管されていた先代庁舎のステンドグラスと、円形のシンボルマークが彫り込まれた部材の一部が再発見され、以前からの疑問が少し解けたのである。

市庁舎のステンドグラスは現在も1階に一部保存されているが、今回再発見したのも市章の滲つくしを中央に配した美しいデザインである。大阪人が滲つくしを愛し、誇りにしてきたことは、大阪市中央公会堂の特別室のステンドグラスにもデザインされていることで分かる。同館のボランティアさんたちによって清掃され、四分割されていたパートが一つにあわされて展示される。

驚いたのがシンボルマークである。大正14(1925)年、第二次市域拡張を行って“大大阪”が誕生したことを記念して開催された「大大阪記念博覧会」のポスターには、中之島や大阪城を上空から見下ろした背景に、羽のある帽子をかぶった青年が立つ。この青年は、本連載第35回に紹介したローマの神で、商工業を司ったメルクリウスと考えられ、彼がかかげる不思議な形のたいまつは、まさに再発見されたシンボルマークと同じ形であった。(拙稿は「いちようネット-大阪市生涯学習情報提供システム-」ホームページで検索)

メルクリウスは姿に特徴があり、翼のある帽子をかぶり翼のある靴を履いて、二匹の蛇が巻きついた翼のある杖「カドゥケウス」をもつ。中央公会堂の屋根にもメルクリウスの銅像があるし、70年万博を記念にイタリアから贈られた像が、天満橋のOMMビルの前に置かれている。「カドゥケウス」のデザインは、旧制大阪商科大学(大阪市立大学)の校章にも用いられた。

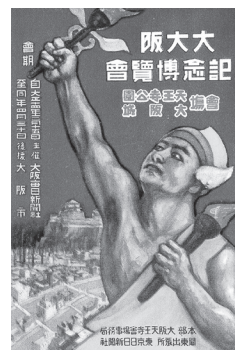
ポスターの青年も「カドゥケウス」とおぼしき杖をかかげている。ただし、中央公会堂の像の杖と比べて短く、たいまつのように^{ほのお}焰があがっている。その点で、青年が本当にメルクリウスとしてよいか



ステンドグラスを清掃するボランティアさん



旧庁舎にあった「カドゥケウス」が原形と思われるマーク。中心がたいまつになっているのは、「大大阪記念博覧会」のポスターと同じ。



「大大阪記念博覧会」のポスター

疑問だった。しかし、再発見されたシンボルマークは、ポスター同様にたいまつに近いかたちをしており、翼は蛇の胴体に直接ついているようにも見えるが、二匹の蛇の頭が彫られて、「カドゥケウス」にたいまつを組み合わせたものと理解できる。

大正10(1921)年に竣工した市庁舎にあったシンボルマークと同じ杖が、「大大阪記念博覧会」のポスターに描かれていたとしても不思議はなく、なぜこの形に変形したかは次の問題として、「カドゥケウス」であった可能性が高い。市長や職員、政治家、商工関係はじめ、庁舎に出入りしていたマスコミや市民も、このマークを日常的に目にし、その意味も理解していたはずである。庁舎建て替えの時に廃棄せずに保存した市職員に感謝するとともに、“大大阪”時代の表象でもあるポスターの謎解きは、展覧会を機にひとつ前進したわけである。

ここまで調査を進めていたら訃報が届いた。近代建築史の専門家で大阪歴史博物館の酒井一光氏が、闘病生活の末、49歳の若さで逝去されたのである。歴史博物館での「煉瓦のまち タイルのまち」「民都大阪の建築力」「村野藤吾 やわらかな建築とインテリア」など特別展は視点もユニークで、近代建築の街歩きで、その人柄に触れられた方も多だろう。取り壊される近代建築の煉瓦や装飾物を惜しみ、保存収集にがんばった学芸員でもある。

近代建築研究に一層の業績を残したであろう逸材であり、再発見されたステンドグラスやマークの話を開けばとても喜んだことだろう。大阪の建築史研究の大切な部分が断絶したと思うと悔しく、悲しい。酒井君、いろいろとお世話いただきありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂-なにわ 知の巨人-」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像-」(創元社)など。